

第7回国際蜂療大会に 参加して

中村 純

2004年6月28~30日に中華人民共和国四川省の成都市および樂山市峨眉山市で第7回国際蜂療大会が開催された。この会に大会委員長で、国際蜂療保健研究会会長の房柱教授から日本のプロポリス事情について話して欲しいという要請があり、参加することになった。

国際蜂療大会

国際蜂療大会は、従来、蜂針療法を主体とする狭義のアピセラピーの普及を目指してきており、このことは今回、日本からの参加者としてNPO法人日本アピセラピー協会(旧:日本蜂針療法研究会、太田直樹会長)の一行が中心であったことからもうかがえる。ただ大会自体は蜂毒や蜂針療法だけでなく、ローヤルゼリーやプロポリスなどのミツバチ生産物の健康利用を取り込んだ、広義のアピセラピーへと展開をねらっており、地元中国の参加者にはミツバチ生産物を扱う健康食品産業の関係者が多かった。

150名ほどの参加者であった大会は、国際とは銘打っているものの、中国、韓国、日本の3か国が中心で、マレーシアやシンガポールからの参加者も中国系で、会議自体も結局のところ、英語の通訳は取りやめて、中国語、韓国語、日本語の3言語で進められた。このことには異論もあるだろうが、実にユニークだといえる。

大会では蜂針療法の実地研修もあったが、主軸は学術発表で、その会議録に掲載された55の発表のうちほぼ半数が蜂針関係(31題、兵庫の井上氏の発表も含まれる)、残りは生産物関係(千葉工大の呉先生の発表も含む)であった。また同時に開催された展示会では、ローヤルゼリーやプロポリス製品の出展がほとんどで

あり、やはり広義のアピセラピーへの脱皮が促されている状況がはっきり現れていた。

学術発表の多くは症例報告で、内容的にも玉石混淆ともいえだが、残念ながら多くは科学的検証が不十分で、また中国語から日本語への同時通訳がうまく機能していなかったり、ただ原稿を読み上げるだけの発表が多かったこともあって、実際に評価できるものは少なかった。

それでも発表者の多くが、最終日に何らかの賞を受賞し(筆者も金賞をいただいた)、また開催への協力をしたということで多くの人にながしかの賞を受賞するの、この大会ならではの特徴であろう。

中国プロポリス事情

筆者は、たまたま成都に到着したときに、今大会に参加のため上海から来た邵興軍氏と空港で出会った。彼は超臨界抽出プロポリスを大々的に手がけている江大源生体生物科技有限公司(BeeTop社)の総支配人ということで、会期中の数日間は英語を話せる彼を頼りに、中国のプロポリス事情について直に取材してみた。

取材内容はすでにプロポリス研究者協会の会報にも書いたが、ここでも概要をまとめておきたい。中国のプロポリス生産量は、年間巣箱1箱当たり100gの生産という楽観的な推定で、総計400tほどが見込まれている(実際には300t程度が妥当な数字という)。品質的には北部のもの(いわゆるポプラ型)がよいとされている。

製品化技術は、現在、超臨界抽出法が注目を集めており、エタノールによる抽出も超音波を

【产品说明】 本品含有提纯脱铅蜂胶和
的蜂胶活性精华素松属素
且含有丰富的有机铬和有
一种含有高能量高活性的

【配 料】 提纯脱铅蜂胶 30%、有材

【食用方法】 40滴/次, 3次/日, 酒

【贮藏方法】 阴凉干燥处

【包装规格】 12ml/支 × 5支

プロポリス商品の配料欄に「提純脱鉛蜂膠」の表示

併用するなど、従来の抽出方法に種々の工夫が施されている。最終製品としては抽出物のソフトカプセル製品やチンキ剤が多く出回っている。パッケージは主に中国語と英語の併記で、マレーシアやシンガポールなどへの輸出は行われているが、日本へは有意な量の輸出はない。これは日本が好むような商品を作れないということではなく、国内での需要の伸びが大きく、現状ではそれへの対応でほぼ手一杯だという。ローヤルゼリーを含む健康食品の国内市場は、健康維持を願う消費者によって急速に拡大している。「国家重点科学技術研究項目」にプロポリスの研究が含まれるなどの追い風もあって、健康食品の中でも特にプロポリスは発展著しいと中国関係者は口をそろえていた。

実際に商品化されているプロポリス製品のパッケージの原料（配料）欄には、気になる記述があった。「提純脱鉛蜂胶（鉛を除いて純化したプロポリス）」という表記である。これについて邵氏は、中国産の原塊にはかなりの確率で食品基準値以上の鉛が混入するという。超臨界抽出では抽出に伴って鉛を排除できるのでそのような記述をしないことが多いが、エタノール抽出では何らかの方法を工程に追加して脱鉛している現状であり、それを明示するためにこのような表記が一般化（表示義務があるかどうかは不明）していると解説してくれた。

プロポリスへの鉛の混入は、本誌今号に掲載された Bedascarrasbure 氏らの論文にもあるように、実は中国に限らず、巣箱からかき取る採集方法では塗料や金属部品由来として起こり、かつてアメリカでもプロポリスに鉛が混入していると問題になったことがある。加鉛ガソリンから無鉛ガソリンへの転換が遅れている中国では、小児の血中鉛濃度が WHO の基準を超えているという報告もあり、その原因となっている環境中の鉛（つまりガソリン由来）がプロポリスを汚染しているとも考えられる。

その現状をふまえれば、確かに表示は消費者に安心を与えるものになるかも知れないが、見慣れないとそもそもの原料自体への不信感、違和感につながりかねない気もした。



著名な書家による米寿を祝した一筆(中央:清水氏)

日本の貢献

今大会は、成都から楽山へ会場を移しての变量的な開催であったが、その楽山での会場となったホテルで開かれたお別れパーティは、日中の養蜂交流に多大な貢献をされた埼玉養蜂(株)の清水進一社主の米寿の祝賀会でもあった。清水氏は1973年を皮切りに日中養蜂の技術交流を30年にわたって進めてこられ、その足どりはご本人の著書「日中養蜂技術交流～道を拓く」にも詳しい。中国の養蜂関連の要人たちにとって、最も尊敬すべき、愛すべき恩人であることが全面的なお祝いムードに現れていた。

残念なことに、抗生物質残留問題など、中国のミツバチ生産物の生産現場には幾多の問題が山積み状態となっている。中国産生産物の評価が下がる一方で、日本国内で消費される生産物の多くは中国産でまかなわれているのが現状である。現地での生産指導体制を整えて、安全な生産物を輸入できるように、実際に中国に生産基地を設けたり、人員を派遣・常駐させるような日本企業が増えている。その中から中国全体の生産物の信頼回復につながるような、高品位で安全性の高い生産体制が現れてくる可能性は高く、日本が技術面ではまだまだ貢献できる立場にあるだろう。清水氏のように恩人として感謝される日本人はこの先も続くに違いない。

なお、楽山市に養蜂博物館を建てる計画が進行中で、いずれ要請があれば、協力のご案内もさせていただきます。

(〒194-8610 町田市玉川学園 6-1-1

玉川大学ミツバチ科学研究施設)